

巻頭言

市場のグローバル化と技術戦略の課題

副会長（昭和37年卒）馬場 征彦



私は学部卒業後メーカーにおいて技術部門（通信とコンピュータ）を経て通信関連の事業運営に関わって参りました。そのバックグラウンドから、巻頭言として産業界が抱える課題の一断面を紹介させていただきます。

コンピュータ業界では1964年のIBM360シリーズの発表後次第に、通信業界では1984年のAT&T分割を契機として顕著になった市場のグローバル化は、1990年代に入り加速度的に進展しています。市場のグローバル化はあらゆる業界で進展していますが、とりわけこの二つの業界では、製品がシステム物でありスタンダードアローンでは成り立ち得ないこと、過去の資産を継承することや相互接続性が決定的に重要なこと、製品採否の決定者が個人ユーザーではなく企業であること等の顕著な特徴があります。従って消費者向け製品にも増して技術標準の多数派になることが極めて重要であります。

技術標準にはコンピュータ業界（あるいは米国）流のデファクト標準とかつての通信業界におけるITU（あるいは欧州）型のデジュール標準があるわけですが、近年では標準化スピードの点でデファクト標準が優勢のように思われます。この流れの中で、特に欧州通信業界において、複数のメーカーや通信業者が国をまたがって戦略的に標準化に取り組み、先ず欧州内でデファクト標準化を実現し、最終的にITUでのデジュール化に持ち込むという新しい動きが大きな成果を挙げています。その結果、移動通信の第二世代（日本標準、欧州標準＝GSM、米国発標準等）と第三世代（WCDMA、CDMA2000等）で欧州標準が優勢となり、日本メーカーはグローバル市場において大きく取り残されてしまい痛手を受けています。米国メーカーもまた同様に振るわなくなっています。

第二世代のGSM（Global System for Mobile communications）を例にとり、欧州勢がとった技術標準化戦略について記します。第二世代（デジタル化）移動通信システムは、欧州では1992年、日本では1993年とほぼ同時期にサービスが開始されました。しかし、その後の欧州勢の動きは迅速かつ戦略的でした。「GSM MOU」グループを立ち上げ、積極的に世界の政府機関・通信事業者にGSMの採用を働きかけたのです。技術K/H、ネットワーク運営K/H、事業者間のローミング技術・手法の開発、融資制度等によって通信事業者の囲い込みを行い、日本勢が海外に関心を持ち始めた1994～5年ごろには世界のマジョリティはGSMの方向になっていたのです。現在は、第三世代（広帯域）の移動通信システムの導入が進んでいますが、特にネットワークはGSM技術のエンハンス版となっており日本メーカーの苦戦は続いています。欧州勢は更に世界のマジョリティ獲得後にITUに持ち込み、デジュール標準化にも成功しているのです。

標準化における技術ヘゲモニーは今後ますます重要となり、企業ひいては業界の命運をも左右しかねないと思われまふ。技術力は勿論重要ですが、それ以上に仲間（企業や国々）を結集し戦略的に行動して行くことが極めて重要となっています。しかし日本人の国際感覚や日本の地政学的な立場（アジアの国々との共同行動等）からはなかなか展望が開けないというのが現状です。技術面でも技術標準の策定の初期からグローバル市場を視野に入れて活動することが極めて重要であります。今、次世代ネットワーク（NGN）の議論が盛んでありますが、日本勢が標準化に積極的に参画し大きな寄与を行うことを祈っています。